

目 次

〈言語の科学〉へのいざない	v
学習の手引き	ix
1 人間の言語情報処理	1
1.1 人間の言語情報処理とは何か?	3
1.2 構成素の心理的実在性	9
(a) 構成素としての単語の知覚	10
(b) 構成素境界の知覚	11
(c) 構成素境界の心理的距離	12
1.3 言語処理における情報統合のモデル	14
(a) 即時処理と遅延処理	14
(b) トップダウン処理とボトムアップ処理	18
(c) 直列処理と並列処理	21
1.4 自律説と相互作用説	23
(a) 自律的言語処理	24
(b) 相互作用的言語処理	27
1.5 知覚の方略による言語処理	31
(a) 文処理の七つの原則群：右結合を中心に	32
(b) 最少付加	38
(c) ソーセージ・マシン	40
(d) 袋小路文	41
1.6 言語理解の三位一体モデル	43
1.7 言語処理における透明性の仮説	47
(a) 原理に基づく統語解析	48
(b) 空主語文の処理	51
第1章のまとめ	54
2 言語の脳科学	57
2.1 脳地図と機能局在	59

2.2	ニューロンの機能	62
2.3	ニューロイメーキング	65
2.4	絵の命名課題	66
2.5	ブローカ失語	70
2.6	文の理解過程	72
2.7	音韻処理と作業記憶	74
2.8	作業記憶の役割	76
2.9	ニューラルネットワークの数理モデル	78
2.10	二つの学習	79
2.11	文字系列の学習モデル—遠い関係の学習—	84
2.12	構文学習のニューラルネットワークモデル	86
2.13	言語獲得と理解のモデル	90
	(a) モデルの構造	91
	(b) 学習の方法とシミュレーション	92
2.14	言語の脳科学にむけて	97
	第2章のまとめ	99
3	言語の発生と進化	101
3.1	言語起源論の流れ	103
	(a) 18世紀の言語起源論	103
	(b) Hockett の設計特徴	104
	(c) 言語起源論ルネッサンス	104
3.2	生物学から見た仮説	105
	(a) イブ仮説	105
	(b) 化石による最古の言語能力	106
3.3	言語学による遡及	107
	(a) 比較言語学によってどこまでさかのぼることができるか	107
	(b) Lieberman のシナリオ	108
	(c) Bickerton の原型言語と真の言語	110
	(d) Chomsky の言語の起源に関する態度	116

(e) Pinker の言語漸進的進化説	117
3.4 言語能力出現のシナリオ	118
(a) スキル化による真の言語	118
(b) モジュール性の問題	119
(c) 言語の前適応としての手の運動能力	120
(d) Piaget の感覚運動期の 6 段階	121
3.5 スキル化の意味するもの	123
(a) 形態論の問題	123
(b) 刺激の貧困の議論再考	125
(c) 新しい言語の発生：クレオール・手話	126
第 3 章のまとめ	128
4 言語理論と言語教育	129
4.1 言語理論と言語教育の関係	131
(a) 言語学	131
(b) 言語獲得	136
(c) 第 2 言語獲得	139
(d) モニター仮説	144
(e) 言語教育の言語理論からの独立	146
4.2 言語教育の目的	148
(a) 母語教育	148
(b) 外国語教育	149
(c) 国際コミュニケーションの道具	152
(d) 頭脳訓練	153
(e) E S P	157
(f) 科学構成能力の活性化	157
4.3 メタ言語能力	158
(a) メタ言語能力の活性化	159
(b) メタ言語情報と言語獲得	163
(c) メタ言語能力の発達を促進する教室活動	166
4.4 事例	168
(a) メタ言語能力の発達	168
(b) 日本語の関係節構文のあいまいさ	169

4.5 母語教育と外国語教育の統合	173
第4章のまとめ	177
用語解説	179
読書案内	183
参考文献	187
索引	199

